総合都市研究　第76号　2001

地方都市住民の拡大パーソナルネットワーク
—年賀状調査にもとづく事例分析—
Ⅱ　パーソナルネットワークの変容とライフコース
—男性高齢者における定年退職の影響—

1．問題の所在
2．調査方法
3．事例1　退職後大幅に変容したパーソナルネットワーク
4　事例2　定年退職後も職場縁が中心的であるパーソナルネットワーク
5　事例3　退職前後の知り合いを両立させているパーソナルネットワーク
6．考　察

柳　　信　寛*

要　　約

本稿は都市居住の高齢男性が定年退職によってどのようにパーソナルネットワークを変容させたかについて、福岡市を調査地とした事例研究である。これまでのパーソナルネットワーク研究においては具体的に描かれることのすくなかったその変容過程を年賀状を素材としたインタビューによって網羅的に把握する。調査の結果、男性高齢者のパーソナルネットワークは決して一様ではなく、大いに個人差を含むものであった。特に職場で形成されたパーソナルネットワークの保持・変容は高齢者の心性だけでなく、それまでの職業ライフコースに依拠する部分が大きいと思われる。

1．問題の所在

本稿は定年退職を迎えた男性が、職業生活において形成していた自らのパーソナルネットワークをその後の生活の中でどのように変容させ、現在のネットワークに至っているのかをインタビュー事例を用いて考察するものである。従来の高齢者パーソナルネットワーク研究は、高齢者がどのようなパーソナルネットワークを保持しているのか、そしてその有り様によって高齢者の生活満足度にどのような差違を生み出すのかという点に比較的焦点が当てられていたと思われる。たとえば玉野(1989)は高齢者の主観的幸福感にとって、彼らを取り巻くネットワークの中ではとりわけ配偶者の存在が大きい点を指摘している（玉野、1989)。また浅川（1994）は地域集団や友人のネットワーク集団、職場での縁が継続している集団などに参加している高齢者、特に積極的に参加している高齢者が高い生活満足度を示していることを見いだしている（浅川、1994)。このように高齢者のエゴ・セントリックなパーソナルネットワークの有

*東京都立大学社会科学研究科（博士課程）

り様と高齢者自身の生活満足感が密接な関係にあることは、今後さらに調査・分析が重ねられて行くにつれて、様々な知見を生み出すことと思われる。

しかしながら、ではどのような過程で高齢者のパーソナルネットワークは形成されてきたのかという点に関してはこれまであまり焦点化されてはいない状況である。もっとも高齢者のパーソナルネットワーク形成を動態的に把握する必要性は最近になって提起され始めている。たとえば、森岡(1984)は通念化された高齢者観、すなわち「高齢者とは定年・加齢とともにそのネットワークを縮小させる」「そのネットワークを親族や地域・近隣にシフトし限定化していく」「その様な親密なネットワークで生活している高齢者は幸福である(生活満足度が高い)」「子どもと同居している高齢者は幸せである」というようなステレオタイプ的視点に対して、定年退職後のパーソナルネットワークの変容には、男女差、地域差、階層差が認められることを指摘したうえで、その変容過程にもっと注目すべきであるとしている(森岡、1994)。また藤崎(1998)も高齢者が持つ友人形成欲求がさらに高まり、しかも多様化しつつあることをふまえながら、その要求に対応する受け皿に地域格差があることを指摘している(藤崎、1998)。また江上(2000)は高齢者が職業生活から離れることによって、彼が職業生活時代に築いたネットワークが次第に周辺化することは一般には認められるが、ネットワークは累積的に形成される一面を持つために同化の程度の高かった集団の構成メンバーとのネットワークは退職後も大きな位置を占め続ける可能性を示唆している(江上、2000)。これは退職した男性のネットワークの分析に、これまでの職業ライフコースの違いを導入するもので大変興味深いものである。

いずれにせよ高齢者にとって、一定の社会的地位の低下や役割の喪失は避けられないものであったとしても、その程度にはかなりの個人差が想定されうるし、それは今後も拡大していく可能性は十分にある。そして同様に高齢者のパーソナルネットワークの態様や、そしてそれに至る変容過程も大いに多様化していくものと思われる。したがって高齢者のパーソナルネットワークを検討する際には、現在のパーソナルネットワークを把握するだけでなく、そのネットワークがどのようにして形成されてきたのかを動態的に把握することによって、その多様性にさらにリアリティを持たせることが出来るだろう。

しかしながら、これまでのパーソナルネットワーク研究においては、高齢者対象に限らず、ある時点のネットワークを抽出した静態的モデルの分析は十分に進められているが、各人のパーソナルネットワークそのものの変容や再編についてはほとんど取り扱われていないのが現状である。これはパーソナルネットワークをある程度量的に把握しようとする場合、どうしても調査時点の静態的データに限られるという制約によるものであると考えられる。また調査票の全体のボリュームを考えた場合、対象者が持つ全てのネットワークに対し詳細な情報を得ることは難しく、何とか工夫して何人かをあげてもらうにとどまっている。そして動的な把握を試みる場合にもせいぜい知り合って何年になるか、さらには知り合った機会をたずね得るのみだろう。その意味では調査票を用いた大量観察調査には馴染みにくい項目であると思われる。

したがって、本稿で取り扱おうとする、男性高齢者が定年退職というライフイベントを経験することにより、自身のパーソナルネットワークをどのように変容させたかという観点での研究は従来までほとんど量的に把握されてはいない分野といえよう。

2.　調査方法

よって今回は定年退職を経験した男性高齢者にインタビュー調査を行うことにより、彼の持つパーソナルネットワークの全体像、そして定年退職を挟んでどのように変容したのかを把握することとしたい。そして調査にあたっては対象者の年賀状をもとにしてパーソナルネットワークを把握することにする。もちろん年賀状は年1回の関係であり多分に儀礼的である部分を免れ得ないが、逆に

対象者の目の前に素材そのものがあるので対象者の記憶だけに頼ることなくネットワークを把握できるという利点がある。また日常生活で特に親しくしていないケースにでも対応できる。対象者にとって特に親しくない人物やめったに会話をしない人物でも調査対象に載せることが出来るのである。これは調査票を用いた大量観察では不可能であり、年賀状を用いたインタビュー調査ならではの利点である（矢部、1999,2000）(注(1))。

本調査は、森岡清志を研究代表として1995年から1997年に行われた5都市7地点の調査のうち、福岡市中央区と西区の50歳以上の回答者に対して年賀状調査の協力依頼を行い、協力を得られた11名に関して行われた（2000年1月下旬～2月初旬)。ここではそのうち定年退職を経験した男性3名の事例を取りあつかうことにする。本稿での定年退職とは一企業における定年退職ではなく、就労人生からの退職を意味している。インタビューの順序としては、まず各人のこれまでの生活史を一通り確認した後に、調査時点の直前の年賀状について1枚ごとにどのような関係であるかを詳細にたずねていき各人のパーソナルネットワークを大まかに把握する。そして現在のネットワークがいつ頃からのつながりなのかを生活史を元に確認していく、という過程である。インタビューの時間はきわめて限定されたものであったので、各人の生活史、特に定年退職前後の様子を詳細に描くことは不可能であるが、それぞれのインフォーマントのこれまでのライフコース、現在のパーソナルネットワークの特徴、そして定年退職に伴う変容という順番で再構成してみる。

3．事例1　退職後大幅に変容したパーソナルネットワーク

H.Mさんは現在74才の男性である。彼のライフヒストリーは次のようなものある。大正14年、現在の中国大連にて出生。7才で満州国の新京に移る。昭和12年、12才の時に病気のために家族から離れ単身で帰国する。父の本籍である福岡県三潴郡に身を寄せる。翌年、満州にいた家族も引き上げてくる。父は引き上げた後、筑後市に居を構え少年時代をそこで過ごす。旧制中学(現在のY高校)を経て高専に下宿しながら通う。高専在学中に終戦を迎える。昭和22年、22才で高専を卒業する。筑後市に戻り4月から私立の女学校の教員を勤め始める。担当科目は数学と理科であった。昭和23年7月からYN高等学校に赴任する。このときクラス担任を務め、その教え子達とは今でも年賀状の交流がある。昭和25年、25才で現婦人と結婚する。昭和33年、33才で現在の地に居を構え、それ以来現住所に住み続けて41年を数える。平成4年に次男夫婦と同居するために二世帯住宅に立て替え、その時期は仮住まいをしていた。しかしすでに退職しており、その生活のほとんどを区内においている。YN高校からK高校を経て、U高校に赴任する。U高校には長期間在職しており、その後県内にある教育施設を経て、最後の職場はS高校であった。昭和59年、59才で退職し、現在退職して15年目に当たる。

子どもは3人いて全員結婚している。長男は東京都におり、次男は二世帯住宅で同居し2階に住んでいる。長女は近郊に住んでおり自転車で10分程度の近い距離に住んでいる。調査時も長女の息子（対象者の孫）が遊びに来ていた。

退職後は地域社会での活動を積極的におこなっている。まず、61才で地域の町内会長に就任し今年で13年目になる。62才で校区の保護司となり現在12年目である。4年前から校区の代表を務めている(任期は平成12年3月まで)。福岡市の場合、各校区単位でいわゆるボランティアの形として保護司が委託されている。一応、法務省の承認を受け、法務大臣の辞令が発行されているのだが、あくまでも有志ボランティアという位置づけである。現在では元教員を始めとして、僧侶や神主が担当しているそうだ。多いときには同時に3人を受け持っていた（通常は1～2名)。年齢層は10代後半から70歳前後と幅広く、男女の別はない。月1回の往訪と月2回の来訪が義務づけられている。生活のチェックをしたり、就職などの相談に応じたりするが、その後年賀状などで連絡を取り合っている人はほとんどいない。昨年は1通だけ年賀

状があったそうだ。

また、60才から地域の老人クラブに所属している。3年前からは校区老人会連合会長に就任し、区の福祉課の職員と月1回の割合で会合を開いている。現在、同居しているのは婦人だけである。しかし二世帯住宅として2階に次男夫婦がおり、長女夫婦も近くに住んでいる。また、町内会長、保護司、老人クラブ連合会長を務めているため来客も頻繁である。いつも忙しそうであると奥様は言う。

3．1　パーソナルネットワークのカテゴリーと構成

H.Mさんの年賀状は143枚であった。彼による分類は、(1) 親族28枚、(2A) 老人クラブ14枚、(2B) 町内会36枚、(2C) 保護司仲間24枚、(3) 先生仲間15枚、(4) 同窓生15枚、(5) 教え子4枚、(6) 趣味の友人・昔からの知り合い7枚、であった。(2A)、(2B)、(2C) に関しては、最初「退職後知り合った現在の地域社会活動の仲間」という1つのくくりであったが、インタビューを進めていく中で3つのカテゴリーにさらに分類したので、そちらの分類を採用することにした。

(1) 親　族

まず特筆すべきであるのは親族の枚数の多さである。このことは彼の両親がそれぞれ7人きょうだい、3人きょうだいと多く、そのためにいとこが非常に多いという事によるものである。いとこからの年賀状は総数で19枚であった。その中でも福岡市やその近郊に住んでいる7名のいとことは年に1回以上会っている。その他の12名は多くは福岡県内に住んでいるものの「年賀状のみ」のつきあいである。妻方の親族からの年賀状も5枚と多く年に1回程度妻の実家に集合しているようである。また次男の妻のきょうだいから届いた年賀状も2通あるが、次男夫婦が2階に住んでいるために、時々遊びに来たときに顔を見せているためであろう。

(2A) 老人クラブ

老人クラブには60歳で定年した後すぐに加入しており、現在14年目に当たる。親密な関係にあるのはH.Mさんよりも若干年上で、全員が区内に住んでおり、彼がクラブに加入したときにすでに加入していた人達である。その中で1人が自営業を営んでいる他は全員無職である。月に1回H.Mさんの自宅から歩いて5分ほどのところにある「集会所」に集まって活動している。知り合って14年というのは各人のそれまでの人生について何らかの情報を知り得るには十分な年月であると思われるが、意外にも年齢と住所以外にはほとんど知らないそうである。女性も3名いる。また区の福祉課で何かと世話をしてくれる職員と個人的に親しくつきあっている。月に2～3回福祉課で会っている。その他には校区老人会連合会の会長職に就いているために各校区の老人会の代表や儀礼的な年賀状が7通あるが本人は特に親しさを感じてはいない。

(2B) 町内会

老人クラブ加入と同様に、定年退職後は町内会に積極的に参加するようになっている。したがってこのカテゴリーに該当する人達も知り合って14年と長いつきあいである。比較的小さな範囲で町内会が組織されていることもあって、各員のパーソナルデータに関してはかなり詳細に知っている。特に親しい人たちの年齢は65歳以上であるが、未だに自営業を営んでいる人も多い。月に1回は公民館で催される会合の場で会っているが、日頃も互いの自宅を訪問し合っている。町内会に積極的に参加するようになってすぐに会長職を任せられており、現在13年目である。そのために区や各校区の代表、さらに様々な機関からの年賀状も多いが、本人は儀礼的なものとしている。

(2C) 保護司仲間

定年退職後新たに始めたものに保護司の仕事がある。あくまでも本人はボランティアと位置づけているが、月1回定例会議が保護観察所や保護司会代表が提供する集会所で催されている。そこで顔をあわせている保護司仲間からの年賀状は20枚になるが、それほど親しいというわけではなさそうだ。全員が区内に居住しているが、年齢・性別もバラバラであり、詳細は全く知らない。名簿に住所が記載されているために年賀状のやりとりが

可能になっているのだろう。本人は保護司仲間からの年賀状よりも、かつて世話をした「元対象者」からの近況連絡を楽しみにしているだが、年賀状があることはまれだそうだ。昨年は1通あったが調査年には1通もなかった。

(3) 教員仲間

長らく教員生活をしており、職場を6箇所移動しているので、知り合い数は多いと思われた。しかし、教員仲間からの年賀状は意外に少なく15通であった。彼らもほとんどが退職している。その中でもＵＮ高校時代の教員仲間と未だに交流があるが、OB会が2年に1回開催されているためである。それ以外は定年して14年を経過した現在、全く年賀状だけのつきあいになっている。

(4) 同窓仲間

特に親しいのは高専時代の友人5人である。皆定年退職しており、無職となっている。全員が福岡市やその近郊に住んであり、年に3回ほど飲み屋で旧交を温めている。それ以外は全く年賀状だけのつきあいになっている。

(5) 教え子

長らく教員生活を送っていたが、クラス担任を持つ機会はあまりなくもっぱら教科専任であったために教え子からの年賀状も少なく4通である。全員がＹ高校の教え子であり、数少ないクラス担任をした時期の教え子である。彼らとのつきあいも年賀状のみになっているが、毎年近況を報告してくるので家族のことや現在の職業についてはしっかり把握できている。

(6) 趣味の友人・昔からの知り合い

定年後、趣味として油絵を始めており、師事した絵の先生との交流は個展などを通じて定期的に行われている。また昔近所の居住していたＳさんの父の知り合いや妹の友達からも、当時親しくしていた関係で毎年年賀状が届いている。

3．2　パーソナルネットワークの特徴

H.Mさんのパーソナルネットワークは定年退職後大きく変容しているといえよう。元教員ということで老人クラブや町内会の長、さらに保護司という役職を周囲から期待された感があるものの、職業生活期とは全く異なる生活を定年退職後始めており、そしてその縁でのつながりが彼にとっての中心的なネットワークになっている。逆に教員同士のつながりは現役時代には盛んであったものの、いったん退職すると連絡を取り合う機会が激減している。本人は定年退職というライフイベントを境に生活だけでなくパーソナルネットワークをも再構成している。退職直後は「元教員」といったことで肩肘を張っていた時期もあったが、現在では「地域の一員」として老人クラブや町内会での活動が「自然に」できるようになったという。特に地域のつながりに関しては、現住所に居住して40年近くになるが、教員現役の頃はほとんど妻任せであった。町内会に積極的に参加するようになって、「教員時代の自分が如何にこの地域のことを知らないかということを痛感した」と述べている。

4．事例2　定年退職後も職場縁が中心的であるパーソナルネットワーク

K.Kさんは62歳の男性である。まず彼のライフヒストリーを紹介しよう。彼は昭和12年岡山県に生まれる。3～4ヶ月で北九州市に移りそこで少年時代を過ごす。最終学歴は高校で、学卒後「Ｉ社」に就職する。最初は小倉の営業所であった。昭和34年22歳で結婚する。昭和38年26歳で春日原に福岡営業所を立ち上げる。その後、東京→福岡→広島→大阪→岡山→福岡(常務)→熊本(専務)と転勤を重ねる。最後の職場であった熊本営業所時代はホテルでの単身生活であった。昭和62年に51歳で退職願を提出し受理される。その後は関連会社に勤めるがそこも2年前に辞めて、現在は30人規模の会社で働いている。しかし職場では顧問的位置づけであり、終日フリーであるようだ。現住所は住んで6年目に当たる。子どもは男子が3人だが全員別居している。

Ｉ社グループ内に中間管理職以上の有志で構成される「Y会」という交流会がある。彼が入会した時点では200人前後であったのが、現在では400人近くいるという。毎年会員の名簿が作成されて

いるので、住所および近況の大体のことは分かるとのこと。また、会の総会が年1回大阪で開催されるので、その機会に会うことが出来る。年賀状は会社関連か親族に限られていた。今年が喪中であったことからも実際の枚数は少なかったが、最も関係性が深そうな人には前もって年賀欠礼の報を入れたので今回は年賀のやりとりはない。しかし、その人たちを尋ねてみたところ全員が会社関連の方であった。交際は福岡周辺に住んでいる「Y会」の人が中心となるが、それ以外には同僚や部下の相談に乗ることも多く、その人たちとの関係が続いているようだ。

4．1 パーソナルネットワークのカテゴリーと構成

K.Kさんの年賀状の枚数は総数で19枚であった。しかしながら喪中であったために、例年通りに親しい方との年賀状のやりとりがなされていたのであれば、枚数はさらにあったと思われる。年賀状欠礼の葉書は親しいと感じている人にしか発送していないので、むしろ年賀状に現れてこない人との関係性を注視する必要性があるだろう。

(1) 親族

親族のカテゴリーでくくられたのは6枚である。まず最初にあげられたのが神奈川県に住む36歳の次男である。子どもは3人いるが全員独立しており、実際に会うのは年に1、2回である。親族でしょっちゅう会っているのは自分のきょうだいであり、年に5、6回は会っている。長姉と妹2人は門司、小倉と比較的行き来のしやすい距離に住んでいる。

(2) 会社関係

会社関係の知人の中でも特に親しい人には喪中であるために欠礼の葉書を出している。従って、このカテゴリーに含まれる13人はそれほどには親しくない様子がうかがえる。実際「Y会」のメンバーであっても「年賀状のみ」のつきあいの人がほとんどである。あとは現役時代に世話をした部下などが儀礼的に毎年送ってくるものであった。そして彼らとの日常的なつきあいはほとんどなく、「Y会」のメンバーは年1回の総会で、それ以外とはほとんどあっていない。

(3) 年賀状以外

喪中ということもあって親しい友人はこのカテゴリーに集中している。中核をなすのは「Y会」のメンバーであり、ほとんどが定年退職している。順に名前を挙げてもらったが、福岡近辺に在住している人とは「Y会」の総会以外にもコンスタントに会ったり、手紙や電話のやりとりをしたりしている。年齢も近い人が多く、出会ってからだいたい40年近くになっている。職業人生をずっとともにしてきた戦友といった感が見受けられた。会社に関係しない人はあげられなかった。

4．2 パーソナルネットワークの特徴

繰り返すようだが、対象者は喪中であり、そこからネットワークを類推するしかないのだが、親族をのぞけば、彼のネットワークはすべて会社に関係する人で構成されている。現住所に住み始めたのは6年前からであり、地域でのつきあいもほとんどみられない。また、幼少期は親の転勤が続き同窓生とのつながりもほとんどないそうである。自身も転勤族になったため、子どもを縁とするネットワークもほとんど形成されていない。そして会社での関係がほとんどであるので、知り合ってからの年数も長く、ほとんどが15年を超えている。したがって定年退職後、新しいネットワークはほとんど形成されていないようだ。むしろ関連企業のOB組織である「Y会」のつながりを非常に大事にしており、毎年発行されている会員名簿にて各員の近況や動向をしっかり把握している。彼にとって定年退職というライフイベントは自身のパーソナルネットワークの再構成にはいたっていない。

5．事例3 退職前後の知り合いを両立させているパーソナルネットワーク

S.Nさんは73歳の男性である。彼のライフヒストリーは次のようなものであった。昭和2年8月7日、現在の韓国にて出生する。両親はすでに亡くなっており高齢の義父母に育てられた。小学校、

旧制中学と進み、最終的にはK専門学校（旧専門学校)在学中に終戦を迎える。昭和20年12月に博多港へ帰国する。当時小倉に住んでいた親族を頼り、1年程度人夫として働く。20歳で当時北九州市に駐屯していた米軍部隊に日本語通訳として雇われる。同時に冷蔵庫、冷凍庫の点検・整備の仕事もしていた。昭和25年の朝鮮戦争の動乱期に通訳を辞める。通訳時代の米軍上司の誘いでアメリカの在日法人である輸出入商社「B社」に就職する。職場は福岡市博多港であり下宿先は東区であった。昭和28年、26歳で近くの職場で働いていた奥様と結婚する。結婚当時の住まいは中央区であり、2年ほど居住する。その後昭和30年、28歳で県営住宅に移る。この県営住宅には昭和54年まで24年間住んでいた。昭和32年1月、在日米軍縮小と共に会社の経営も悪化し、福岡支店を閉鎖することになる。東京にある極東本店への誘いもあったが、高齢の義父の病気や外資系に対する不安感もあってその誘いを断った。職探しに東奔西走し、小倉時代の先輩の誘いで冷蔵庫の保守点検業務などをやっていた。

昭和32年11月25日、奥様が新聞の三行広告内に見つけた株式会社「G社」の入社試験をダメもとで受けてみる。運良く合格し、その後、出張所の規模の拡大と共に、所在地を千代町、天神、箱崎と変えていった。昭和45年、43歳で北九州市八幡にある本社勤務となる。この時も南区の自宅から通う。その後、会社の第2次5ヶ年計画作成責任者となり、会社近くの旅館の離れに1年近く缶詰状態となる。その成果が認められ、昭和47年、44歳で社長室長を命ぜられる。会社の別館に部屋を宿泊用に与えられ、週に1回くらい福岡市に帰るという準単身赴任の生活となる。この生活は66歳で退任するまで続くこととなった。

昭和52年、50歳で系列会社の「GK社」に取締役として出向する。昭和56年、54歳で本社に復帰し、産業施設営業本部長となり本社においても取締役となる。昭和62年、60歳で取締役を辞任し同時に退職する。その後再び「GK社」へ取締役として迎えられる。平成4年66歳で取締役を退任し顧問となる。平成8年70歳で顧問を退任し職業生活に終止符を打つ。現在引退して3年目である。

現住所は昭和54年から住んでおり、19年目に当たる。子どもは2人いるが2人とも別居している。長男46歳は結婚しており、市内に住んでいる。長女44歳は独身で近郊の町に住んでいる。現在は奥様と2人暮らしである。職業人時代は、単身赴任などをしていたこともあり、ほとんど趣味などは持っていなかった。顧問就任をきっかけにして積極的に趣味を持とうとしている。特にコレクション部門は充実しており、飲んだ酒類のラベルや各地の名産品の袋などを収集したアルバムで書斎は満杯であった。また、顧問退任後、自分史を執筆している。本人はその作業を自身のライフワークとして位置づけている。カルチャーセンターで「俳句」や「川柳」をはじめたのも取締役退任後であり、現在でも月に2回天神に通っている。8年目である。

5．1　パーソナルネットワークのカテゴリーと構成

S.Nさんの年賀状は151枚であった。彼の分類は、(1) 会社のOB仲間40枚、(2) GK社の現役15枚、(3) G社の現役33枚、(4) 家族・親族25枚、(5) カルチャーセンター仲間10枚、(6) 小学校の同級生3枚、(7) 友人・知人23枚であった。

(1) 会社のOB仲間

このカテゴリーにはG社の先輩や同僚、そして出向先であったGK社の同僚や後輩が含まれている。多くはすでに定年退職しており、かつての部下だった2名の女性を除けば全員男性である。定期的に連絡を取り合ったり、一緒に飲みに行ったりするのは8名であり、それ以外は年賀状のみのつきあいになっている。入社以来のつきあいの人も多く知り合ってからの期間は40年前後の人が多い。

(2) GK社の現役

一時期出向していた期間があり、また最終的には取締役として迎えられ、彼の最後の職場であったGK社の現役社員からの年賀状は15枚であったが、特に親しくしているのは3名である。1人は取締役として自分の後任に据えた人物。そして当

時の部下2人である。彼らとは出向後につきあいが始まったため、知り合ってからの期間は20年である。未だに現役のために、ほとんどが北九州市に住んでいる。したがってなかなか頻繁に会うことはできないが、それでも年に1、2回は出かけていって一緒に飲む機会を設けている。その他も当時の部下からの年賀状であるが、ほとんど年賀状のみのつきあいである。

(3) G社の現役

このカテゴリーに属するのはG社の現役社員であるが、特に福岡の営業所時代の後輩や開発部時代に直接の部下など行動を一緒にしてきた人達とのつきあいが中心である。またGK社に同時期に出向した当時の部下も含まれている。特に親しいのは3名であり、50代後半で全員が役職付きである。彼らとは北九州に出かけたときに一緒に食事をしたり飲んだりしている。様々な相談にのることも多く頻繁に連絡を取り合っている。その他の30枚は年賀状のみのつきあいである。

(4) 家族・親族

このカテゴリーの中で頻繁に連絡を取ったり、会ったりしているのは5名である。長男夫婦や孫は福岡市内に住んでいるので年に4～5回は自宅に遊びに来ている。また長女も福岡市近郊に住んでおり、月に3回は顔を見せている。妻の兄や姪も近くに住んでおり、互いに行き来している。その他は長男の結婚式で同席するような親族であり、それ以来会っていない人も多い。ほとんどが年賀状でのつきあいとなっている。

(5) カルチャーセンター仲間

彼は取締役を辞して顧問に就任してから市内のデパートで行われているカルチャーセンターで俳句を始めている。月に2回開催されており、始めてからは8年目に当たる。その先生や受講生との年賀状のやりとりがこのカテゴリーに当たる。参加を始めたのが8年前であり、それ以来のつきあいとなっている。月に2回催される教室以外でのつきあいは全くないが、皆年齢が近くすでに定年退職した方や主婦で構成されており、気心の知れた集団になっている。それぞれのパーソナルデータに関しては年齢や住所はわかるがそれ以外は全くわからないとのことである。また教室は異なるがセンターで顔を会わせる人とも年賀状のやりとりをしている。

(6) 小学校時代の同級生

学生時代を朝鮮半島で送っていたために、帰国後の連絡先はほとんどわかっていない。その中でも住所がわかっている3名とは毎年年賀状のやりとりをしている。もっとも居住地が遠いために帰国後会ったことはほとんどないそうである。日頃から連絡を取っているわけではなく、パーソナルネットワークとしては外縁に位置すると思われるが、戦中の激動という体験を共有した仲間として大事に思っている。

(7) 友人・知人

G社の福岡営業所時代につきあいのあった業者とは長らくつきあっている。自宅が近所であることから頻繁に訪問している。S.Nさんが現在もっとも親しいとしている人であり、つきあいは35年になる。夫婦宛で3通あるが、奥様の女学校時代の同窓生である。年に2回ほど自宅に遊びに来ている。電話の取り次ぎなどでもよく話をするそうである。またかつては週に1回は訪れていた飲み屋の経営者とも年賀状のやりとりをしている。現在は飲酒を控えているために月に1回程度顔を出している。それ以外の友人・知人はかつてほどのつきあいはできなくなっているようだ。高齢や病気のために互いに行き来することが難しくなっている。ほとんどが年賀状でのつきあいになっている。

5．2　パーソナルネットワークの特徴

S.Nさんは「仕事と酒と自宅との行き来の生活であり、典型的なモーレツサラリーマンであった」と自らの現役時代を振り返っている。そのせいであろうか、居住地域の知り合いや趣味知り合いはほとんどなかった。そのような会社中心の生活から解放されて彼は「定年後、第2の人生で何か始めよう」と俳句のカルチャーセンターに通うようになった。居住地域に関していえば、定年前はほとんど眠りに帰っている生活であり、地域とのつながりはほとんどなかったが、定年後は次第に集

会などにも顔を出すようになったという。まだ親しいという段階でないが、今後ネットワークが広がっていく可能性はあるだろう。一方、退職後も会社仲間との連絡は現在も密に取っているようである。本社が北九州市に位置するため頻繁に会うわけには行かないようであるが、顧問を辞した後も相談事を受けたり旧交を温めたりしている。

また彼は年賀状のやりとりを毎年厳密に記録している。年賀状を出す予定の人には必ず1月1日に届くように発信している。そのうえで彼らから年賀状が何日に届いたかを表形式で一覧にしている。年賀状だけのつきあいや、儀礼的な年賀状であっても、彼にとってみれば年賀状は厳格にやりとりすべきものなのであろう。実際に一覧表を見せてもらったが、最後には来年以降年賀状発進停止の欄があり、こちらから年賀状を出しても返事がない人とは年賀状のやりとりを止めているという。年賀状でしかやりとりをしない人が多かったが、彼自身はその様な人との年賀状のやりとりを非常に大事にしている。年賀状を通じてであるがネットワークを保持しようとしている様子がよくわかる。したがってこれまでの職業人生で培われたネットワークと、そして定年退職後カルチャーセンターなどで創生されたネットワークの双方が両立していると思われる。

6．考　察

このように提示された年賀状から浮かび上がるパーソナルネットワークをこれまでのライフヒストリーと関連づけながら詳細に描いてきた。分析の焦点は定年退職という人生上の大きな経験によって各人がそのパーソナルネットワークをどのように変容させているかという点にある。したがってまずその変容について事例をまとめておくことにする。

H.Mさんは教員生活を終えたあと、老人クラブや町内会に積極的に参加するようになり、現在ではそのパーソナルネットワークの方が中心的である。旧職場の同僚なども年賀状を通じての関係はあるが、それほど親密なものではない。彼にすれば、今現在の生活における接触頻度の高い人間関係を尊重しており、それはなによりも老人クラブの仲間や町内会で顔を合わせる近隣の住民たちである。また、定年退職後に老人クラブや町内会に参加するようになったので、そのような人達と知り合ってからの期間は職場の知り合いや同窓生に比べてはるかに短いものの、緊密な関係に至っている。彼はすでに「元教員」として自分自身を位置づけることはせずに「地域の一員」として地域の活動をしている。したがって定年退職というイベントを期に全く新しい生活に切り替わり、その結果全く新しいパーソナルネットワークを作り上げたといえよう。

K.Kさんは退職後も会社のOB組織を通じて、会社のOB仲間や現役社員とのつながりとしっかりと保持している。しかしながら地域や趣味による知り合いは全くネットワークの中に入っていない。形式的には定年退職をしているのだが、本人自身は未だに会社組織の中で自分を位置づけているようである。

S.Nさんは「モーレツな」サラリーマン人生を送った後に定年退職を迎えた。本社や関連会社の取締役という地位を経験した彼にとって未だに会社のOB仲間や現役社員との交流が保持されていることはもっともなことであろう。このような会社仲間との関係は会社が福岡県内にあることからもK.Kさんよりもさらに多岐にわたっており、接触頻度も高いものであった。しかしながら、彼は定年退職後にそれまでにはなかったネットワークを広げている。それは会社人間であったために何の趣味も持たないまま過ごしてきた人生への脱却をはかったものであった。カルチャーセンターに通うようになり、これまでとは全く異質の人間関係を構築している。量的にはH.Mさんに及ぶものではないが、現在の彼の生活を支えている大切なネットワークである。彼は退職前のネットワークと退職後自らが作り上げたネットワークの双方を生活の中に内包していると思われる。

3者の事例に共通していることは、まず彼らが定年退職まで地域・近隣のネットワークをほとんど持っていなかったということである。特に町会・

自治会などの地域自治組織には全く無縁の存在であった。配偶者は全て専業主婦であり、地域での交流は全て妻が担っていたと思われる。

また3者とも被雇用者としては比較的高い地位にまで到達して退職している。社会経済的地位の高さは現役時代のパーソナルネットワークのほとんどが職場に関わるものであったことからもうかがえる。「モーレツ」な職業人であり、その甲斐あって職制としては結構な地位にまで達している。そして自らのパーソナルネットワークもそのほとんどが職場に関係するものであり、逆に居住地域などにおける近隣との交流は全て妻に任せていた。そのような姿がイメージできよう。

一方、3者で異なっている点はまず年齢である。そして定年退職してからの年月にもかなりの差が生じている。さらに現住地での居住歴にも明確な違いがある。H.Mさんは住宅改装という一時期を除いては40年以上現住所に居住している。S.Nさんは準単身赴任の生活であり現住所での生活は実質的には6年程度である。K.Kさんは転勤の多い生活であり、現住所には6年前から住んでいる。したがって3者とも地域でのネットワークはほとんど持っていなかったという点では共通しているが、その居住歴には大きな差があるということが確認される。

そして本稿の中心課題である定年退職におけるパーソナルネットワークの変容、新しいパーソナルネットワークの形成過程には大きな違いが見られる。まったく職業時代とは違うネットワークを地域を中心に作り上げたH.Mさん。それとはまったく正反対に職業人時代のネットワークを保持し、その後の変容がほとんど見られないK.K.さん。職業人時代のネットワークを維持しながらも趣味のサークルなどで新しいネットワークを構築したS.Nさん。定年退職後の彼らのネットワークの違いはどのように説明できるのだろうか。

まず3者の違いに着目してみよう。これまで全く地域でのネットワークを持っていなかった男性にとって居住年数の長さは、これまで何らのアクションを起こしてこなかったにせよ、その後のネットワーク形成にとって大きな意味を持つものと思われる。地域集団の会合などに特に顔を出していなくても永く居住することによって地域の一員として認められるのであろう。そして定年退職してからどれくらいの時間が経過しているのかも同様にネットワーク形成にとって大きな意味を持つであろう。一朝一夕にネットワークは変容するものではない。定年退職してまだ数年しか経過していないK.KさんやS.Nさんも数年後には新しいネットワークを形成していることであろう。このことは各人が自分をどのように位置づけているのかという点にもつながってくるものである。定年退職とはあくまでも雇用者との契約関係の終了であって、むしろ定年退職という事実をどのように受け止めるかが各員のその後の生活に大きく影響をおよぼしていると思われる。定年退職してからの時間の経過が短い場合には、新しい自分の位置づけが出来ないままに、たとえ働いてはいなくとも職業人としての心性を保持し続けているように思われる。高齢者にとっての地域集団や友人からなるパーソナルネットワークの存在が生活満足度や主観的幸福感に影響を及ぼすとはいえ、定年退職して日が浅い彼らにとってはとりたてて希求しなければならないものではないのだろう。むしろ自らの心性が職業人として保持できなくなり、新たなネットワーク形成の欲求が高まったときにどのように対処するのかが問題となってくる。藤崎(1998)も指摘するように、高齢者のその様な欲求に地域や行政組織がどれほど対応できるのかは大いに疑問視される。たとえば地域集団の代表である町内会は、その担い手が高齢化していき、さらにある特定のメンバーの活動に収縮していく過程で、新しい担い手を積極的に求めているといわれるが、その一方で相変わらず閉鎖的な部分を多く含んでいる。S.Nさんのように自ら積極的に新しいネットワーク形成のために行動できる人はよいが誰もがそうであるとはいいがたい。高齢者が積極的に新たな集団や仲間づくりに取り組むように、高齢者自身で努力しなければならないと同時に、それを受け入れる地域や組織、施設も受け入れる体制を改善し門戸を低くすることが必要であろう。

そして今回もっとも注目したいのは各人のこれまでの職業ライフコースによる違いである。職業時代の関係を保持している大きな要因として、その時代のネットワークが強固に組織だっていた点が上げられるよう。確かに自社内での転勤などにより直接自分の身の回りで形成されるネットワークは多少変化しようが、基本的には会社組織全体で大きなネットワークを形成しており、その組織の外に身を置くことは出来そうにもない。それは名簿という形で関係性を弱めることなく現在にまで引き継がれていた。このような強固に組織だったネットワークの中で職業生活を送っていたK.KさんやS.Nさんがいまだに職業時代のネットワークを保持しているのも本人自身の心性もあるが、そのネットワークの組織力も関係しているのだろう。一方、長年学校に教師として従事していたH.Mさんはいくつか学校を移動しているが、そこでのネットワークは学校それぞれで形成されており、学校が変わると何人か親しい教員仲間とのつながりを残して新たな学校でのネットワーク形成のほうに重点が置かれている。ネットワークを強化する組織が継続されておらず、それぞれの場においてそれぞれのネットワークを新たに形成し解消してきた職業ライフコースといえよう。したがって定年退職を迎えた後それまでの職業人生時代に築きあげたネットワークは長年にわたって堆積された厚みのある壊れにくいネットワークではなかったと思われる。

またH.Mさんの職業が教師であったという点も大きいと考えられる。すなわち彼は定年退職後すぐさま町内会長の職に推されているが、地域社会にとって教師という職業経験者は格好の人材に思われる。まずなによりも元教師という名声である。地域の名望家層による町内会運営の時代が過去のものになりつつあるとはいえ、やはりそれなりの人材を長に据えたがるものであろう。また数多くの人間を統括し指揮するノウハウを修得していることも期待される。会合・寄り合いなどでの議事進行や事務能力も教師経験が大きく効果を発揮するであろう。このように考えれば教員という存在は地域社会の方が積極的に必要としている職業ライフコースという考え方もできるのではないだろうか。そしてもう少し論を展開すれば地域社会にとって受け入れやすい職業経験とそうでない職業という分け方が可能であるかもしれない。

終身雇用の神話は崩壊し男性も様々な職業ライフコースを歩み始めた。それは今後ますます多様化して行くであろう。そのような多様化が、職業生活に別れを告げた定年退職後の生活やパーソナルネットワークのありようにも多様化をもたらすという仮定が正しいとすれば、高齢者を一括りにしたステレオタイプ的な視点はますます意味をなさなくなるであろう。高齢者における生活の多様化や格差を分析するにあたって、従来の教育程度・所得・資産などの階層的視点に加えて、特に男性において、どのような職業ライフコースを描いてきたのかという視点を導入する有効性は今後ますます高まるものと思われる。

謝辞

お忙しい中、長時間にわたってのインタビューに快く協力下さいました3者に厚く御礼申し上げます。

注

1) もちろん年賀状に現れてこない密接な関係もある。そのような関係には、『年賀状を交わしてはいないけれども親しい人はいますか』と言う質問で部分的にではあるが補完している。また企業や商店からの儀礼的・広告的な年賀状であることが明らかな場合には分析から除外している。

参考文献

浅川達人「生活感と地域特性」，森岡清志・中林一樹編『変容する高齢者像　大都市高齢者のライフスタイル』日本評論社，p.119-139，1994.

江上渉「家族・地域社会と高齢者の生きがい」，『社会学年誌』41号，早稲田社会学会，2000.

玉野和志「日本の高齢者の社会的ネットワークについて」，『社会老年学』30，p.27-36，1989.

藤崎宏子『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館，1998.

森岡清志「定年後のパーソナルネットワーク」，森岡清志・中林一樹編『変容する高齢者像　大都市高齢者

のライフスタイル』日本評論社，p.159-185，1994.
矢部拓也「年賀状事例調査を通じての大都市のパーソナルネットワーク」,『総合都市研究』69，p.137-150，1999.
矢部拓也「事例分析：年賀状調査による拡大パーソナルネットワークの分析」，森岡清志編『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会，p.161-193，2000.

Key Words（キー・ワード）

Age Limit Retirement（定年退職），The New Year's Card（年賀状），Life Course（ライフコース）

The Loose-network of Non-metropolitan Cities: Case Study using New Year's Cards (Nengajo)
Ⅱ The Temporal Change of the Personal Network in Life Course: Influence of the Age Limit Retirement in the Male Aged

Nobuhiro Yanagi*

*Graduate Student, Tokyo Metropolitan University
Comprehensive Urban Studies, No.76, 2001, pp.115-127

The purpose of this manuscript is to announce how the advanced age male of the city residence changed the personal network by age limit retirement. The survey ground is Fukuoka-city. The change process remains in existing personal network research and have not been studied. Therefore I grasp it to the target that includes the personal network by the interview that consisted of the New Year's card. The personal network of the male aged was never monotonous as a result of the survey. It includes individual difference greatly. The hold of the personal network that was formed in the workshop especially is greatly influenced to the occupation life course to it in addition to the mentality of the aged.